

はじめに

本日は 16 章 1 節から 17 章 23 節までを学びます。17 章 24 節では「会戦の準備」とありますので、それまでの経緯が語られています。

新共同訳の見出しに従うと「ダビデとツィバ」、「ダビデとシムイ」の二つの記事があります。ダビデが「都落ち」して旅を始めたとき、旧サウル王家の関係者であるツィバとシムイが、それぞれにダビデの一行を支援したり、呪ったりした、という記事です。

続く「アヒトフェルとフシャイ」では、エルサレムに入城したアブサロムたちが、「ダビデの友」フシャイに出迎えられたことがいわれます。次にアブサロムはアヒトフェルの意見に従ってダビデの王宮を奪ったことがいわれます。そして最後にダビデに対する追撃作戦に関してアヒトフェルの案とフシャイの案が協議され、「ダビデの友」であるフシャイの案が受け入れられます。

その結果、アブサロムたちはこれまでアヒトフェルの指導の下にありましたが、「ダビデの友」フシャイの指導のもとになります。そのためアヒトフェルには自害して果てます。それは、アブサロムがダビデ王に負け、自分は死刑になることが確実に予見できたからです。

わたしたちは、こうした一連の出来事の中で、主なる神がどのように証しされているのかを学び取りたいのです。

I サムエル記下 16 章 1 節～17 章 23 節の話の流れ。

早速、サムエル記下 16 章 1 節から 17 章 23 節までの話の流れを見てみましょう。

1～4 節。ここではダビデの一行がオリブ山の山頂を少し下ったときに、ツィバが食糧を積んだロバと共に現れます。ツィバは、ダビデの親友ヨナタンの従者でした。しかしヨナタンの死後は、その息子メフィボシェトの従者となり、ダビデに仕えていました。彼は、都落ちするダビデに味方して登場したわけです。ロバはダビデの家族用に、パン二百個、百房の干しぶどうと夏の果物、ぶどう酒をもたらししてくれたのです。しかも彼は、自分の主人メフィボシェトの動静を伝えました。メフィボシェトは当面、アブサロムに味方するものの、本心はサウル王家に再興にあるというのです。そこでダビデは、メフィボシェトに属するものはツィバのものであるとあって、事実上、彼を自分の家臣に加えました。

5～14 節。ダビデ王が山腹の村バフリムにさしかかると、シムイという者が出てきて、ダビデ王とその一行を呪いました。しかも石を投げつけたりもしたわけです。シムイは、サウル家の出で、いわば残党の一人です。彼はダビデが都落ちするのを見て、ここぞとばかり、呪いの言葉を浴びせ続けました。しかしダビデは、その呪いを甘受しています。ダビデの姉ツェルヤの子アビシャイがシムイの首を切り落してやりますという、それを止めています。それは「主がわたしの苦しみを御覧になり、今日の彼の呪いに代えて幸いを返してくださるかもしれない」とあって、ダビデが自分の歩みを主に委ねているからです。

以上のように 16 章 1～14 節は、サウル系の者たちが登場し、一人はダビデを助け一人はダビデを呪ったわけです。こうしてダビデの一行は、どうやらバフリムに「疲れて到着し、一息ついた」ようです。急峻な下り坂はジグザクであったためでしょう。その後のことは、17 章 24 節を見ると分かります。ダビデの一行はヨルダン川を渡り、川沿いに北上し、ヨルダン川に東から注ぎ込むヤボク川の向こうのマハナイムに向かって歩みを進めたことが分かります。

他方アブサロムたちのことです。まず 15～23 節です。アブサロムの一行は、15 章 37 節にあるようにエルサレムに入城しました。そうすると先にエルサレムについていたフシャイが、彼らを出迎えました。フシャイは「ダビデ王の友」という役職についていた者でしたから、巧みに語って疑いを解き、「主とここにいるイスラエルの全員が選んだ方に従います」といい、さらに「御息子に仕える」といっています。この時、フシャイは決してアブサロムという名前を口にしなかったのです。

さてアブサロムはエルサレムに入城してしまうと、何をすべきか分かりません。それでアヒトフェルに「どのようにすべきか、お前たちで策を練ってくれ」といっています。通常ならば、油を注ぎ、全イスラエルの王となったことを布告するのが筋ですが、そのようなことは考えていなかった

たようなのです。ということは、イスラエルの王ではなく、世俗の王家と同じく先王の王権を奪い去ることのみを考えたということです。その点、知恵のあるアヒトフェルも同じでした。彼は、アブサロムに王宮にいるダビデ王の側女たちと寝て、ダビデの王宮を完全に支配したことを内外に知らせるようにと助言したのです。アブサロムはそのようにしました。王宮の屋上に天幕を張り、側女たちと寝たのです。こうしてかつて預言者ナタンが 12 章 11 節でいったことが実現したのです。

その後、17 章 1～23 節では、ダビデ王の一行を追撃するために作戦を協議しています。まずアヒトフェルが提案します。彼はダビデ王とその一行が疲弊していること、迅速に今夜のうちに追撃隊を派遣すべきことをいっています。1 万 2000 の兵で追撃し、疲弊しているダビデ配下の兵を追い散らし、アヒトフェル自らがダビデの首を持ってくるというわけです。そうすれば逃げ出した兵は自分たちの所に戻ってくる、ということでした。

アブサロムはじめイスラエルの長老全員の目に正しいものと映ったのです。しかしフシャイが反対し、自分の追撃作戦をいうのです。まずフシャイはダビデが戦上手の強者であることを皆に思い出させます。アヒトフェルのいうように追撃隊を直ちに派遣しても、ダビデはすでに部下たちとは別の洞穴かどこかに身をひそめて休んでいるに違いない、というわけです。そうすると、追撃隊はいわば空振りに終わります。実際、ダビデはサウル王の追撃から逃げるために洞穴を利用したことは皆知ってしました。ですからアヒトフェルの追撃案はこの時点で却下されたのです。

その上でフシャイは、むしろイスラエルの全軍を召集すべきだといいました。北のダンから南のベルシェバにいたるまで兵を召集するというのです。当然、それには時間がかかります。その間、ダビデ王とその一行は疲れをいやす余裕がうまれるのです。さらにフシャイは、アブサロムが全軍の戦闘に立つようにというのです。明らかにアブサロムの名誉欲を刺激してのことです。しかしまた戦の経験のないアブサロムが総大将となるとどうなるか。軍を上手く指揮できず、混乱を招くわけです。フシャイの狙いはそこにありました。しかしアブサロムも他の者も、フシャイの案に賛成してしまうのです。

こうしてフシャイは、祭司ツアドクとアビアタルに、この作戦が実施されることを告げ、彼らがヨナタンとアヒマアツに連絡するようにと取り計らうのです。この時、聖書は、一人の女性が、祭司ツアドクとアビアタルの意を受け彼らに伝えたといっています。

しかし一人の若者が、ヨナタンとアヒマアツを見かけ、アブサロムに通報したので、彼らはバフリムのある男の家に身を隠します。そして追手が来るので、二人は井戸に下りて身を隠します。するとその男の妻は井戸の上に覆いをかけ、その上で脱穀した麦を広げたのです。料理の準備をすところだと示したわけです。

こうした二人の無名の女性のお陰で、ヨナタンとアヒマアツは、ダビデ王に知らせることができました。ここで注目すべきは、アヒトフェルがこれこれの追撃作戦を立てたといっていることです。つまり、アヒトフェルはフシャイの追撃案が承認されたにもかかわらず、自分の意で、ダビデ追撃隊を派遣する可能性があったということではないのでしょうか。ともかく、ダビデは連絡を受け、直ちにヨルダン川を渡ったのです。「夜明けの光が射すころには、ヨルダン川を渡れずに残された者は一人もいなかった」といっています。こうしてダビデ追撃の危機よりも一歩先んじて、ダビデたちは行動することができたのです。

こうしたことのため、アヒトフェルは「自分の提案が実行されなかったことを知ると」自宅に戻りそこで首をつって死んだのです。要するに、アブサロムたちを支配するのはもはや自分ではなく、「ダビデの友」フシャイに移ったのであって、最早自分の運命は死刑しかないことが分かったからです。以上のことを箇条書きすると次のようになります。

第一部 「都落ち」するダビデを祝福するものと呪う者、オリーブ山の山頂からバフリムまで

1. 1～4 節、ツィバ、ダビデの味方になる。
2. 5～14 節、シムイ、ダビデ王とその一行を呪う。

第二部 エルサレムにおけるアブサロムとアヒトフェル。

1. 15～19 節 「ダビデの友」フシャイ、アブサロムとアヒトフェルを迎える。
2. 20～23 節 アブサロム、アヒトフェルに従いダビデの王宮を支配したことを宣言
3. 17 章 1～14 節、ダビデ追撃作戦の協議、アヒトフェル案が捨てられ、

フシャイ案が実行される。

4. 17 章 15～22 節、フシャイ、「祭司ツァドク・アビアタル - ヨナタン・アヒマアツ」の連絡網を使ってダビデに知らせる。

5. 17 章 23 節、アヒトフェルの自害

Ⅱ. サムエル記下 16 章 1 節～17 章 23 節の解説

【1～4 節】

ここはヨナタンの子メフィボシェトに仕えていたツィバが、ダビデ王とその一行に味方した記事です。ツィバがダビデとその一行のために用意したロバや食べ物は、実に、配慮の行き届いたものでした。この時、ツィバは、メフィボシェトの動静をダビデに伝えています。当面、アブサロムに味方するが、サウル王家の再建を願っている、ということです。このためダビデはツィバを自分の配下とします。

【5～14 節】

ここはサウル家の生き残りの一人であるシムイという者が、ダビデ王とその一行を呪いながら石を投げつけたという記事です。注目すべきは二つあります。第一はシムイの誤認です。ダビデは、「サウル家のすべての血を流して王位を奪って」いませんが、シムイはそうにしています。この誤認は、「主がお前の息子アブサロムに王位を渡されたのは、お前が流血の罪を犯したからである」という間違った解釈から出て来たようです。ダビデ自身は、流血の罪を犯したと思っていま

すから呪いは甘受しますが、その流血の罪とはウリヤを討ち死にさせたことなのです。第二にダビデはシムイの呪いの言葉を語らせるままにしています。それは、主の御命令で呪っているという認識があるからです。さらに「主がわたしの苦しみを御覧になり、今日の彼の呪いに代えて幸いを返してくださいかもしれない」ので、そのまま呪われるままにしておきます。つまり主なる神に自分の運命を委ね、主に希望をもっているのです。ここにダビデの信仰があります。自分を呪う神を信仰しているというのは、いわゆる御利益信仰では全く理解できないことです。しかしダビデの信仰は、全被造物の創造主である神を信じるというものであって、全被造物を御心のままに裁きまた救う主権者としての神を信じることなのです。

【15～19 節】

さてここは、ダビデが派遣したフシャイが、アブサロムとアヒトフェルを出迎えた記事です。彼らは、エルサレムにまさか「ダビデの友」フシャイが残っているとは思ってもみませんでしたから意表を衝かれ驚いたことでしょう。ここにすでにダビデの作戦が始まっています。フシャイは巧みに挨拶し、王の御子息に仕える、とっています。すでにふれたようにフシャイは、アブサロムという名前を一言もいっていません。

【20～23 節】

さてアブサロムは、エルサレムに入城したものの、何をすべきか分かりません。これは奇妙なことです。イスラエルの王に即位するなら、油の注ぎをするはずですが。アブサロムは祭司としての教育を受けたはずなのに、そのようなことを思いつきもしないのです。この点、アヒトフェルも同様です。つまり彼らは、イスラエルの王ではなく、世俗の王家に見られる権力争いの立場にいる、ということです。

実際、アヒトフェルの提案は、アブサロムが王宮に残ったダビデの側女たちと寝て、ダビデの王宮を奪い取り、王となったことを内外に知らせるというものでした。アブサロムは、そのようにします。王宮の屋上に天幕をはり、そこでダビデ王の側女たちと寝たのです。

しかしこれは預言者ナタンの預言の実現です。その意味で、アヒトフェルの提案は、確かに神託のようなものということができるわけです。

【17 章 1～14 節】

こうしてアブサロムが王として内外に宣言したので、今度はダビデ追撃について協議しています。最初にアヒトフェルが追撃案を語ります。この案は、ダビデ王とその一行が疲弊していることを正しく見抜いたもので、迅速に追撃隊 12000 名を派遣すれば成功する可能性のあるものでした。そこでフシャイがその追撃案に反対します。彼は、ダビデ王が戦に優れている人であることを人々

に思い出させます。アヒトフェルのいうように追撃隊を派遣したところで、ダビデ王はその場からすでにいなくなっているかもしれないというのです。

その上で、フシャイは自分の追撃案を言います。まず全イスラエルから兵を召集すべきだといっています。これはもちろん時間稼ぎのためです。次にフシャイは、アブサロムが全軍の総大将になるべきだといっています。これはもちろんアブサロムが戦争の素人であることを見越してのことです。アブサロムは軍を上手く指揮できず、混乱して終わることが予想されます。

しかしアブサロムたちは、フシャイの追撃案を承認してしまうのです。これは、もちろんダビデがフシャイに、「あなたはアヒトフェルの助言を覆すことが出来る」といったとおりになったということです。しかし聖書は、それ以上に、このことは主なる神の御心であった、といっています。

【17 章 15～20 節】

こうしてフシャイは直ちに、「祭司ツァドク・アビアタル・ヨナタン・アヒマアツ」の連絡網を使ってダビデに追撃作戦が協議されたことを知らせ、ただちにヨルダン川を渡っていくようにと知らせることができたわけです。ここでもダビデが予め用意した、いわば「スパイ・ネットワーク」が功を奏したわけです。

しかしここで注目すべきは、その「スパイ・ネットワーク」には入っていない者たちの活躍です。一つは、祭司ツァドク・アビアタルからヨナタン・アヒマアツに連絡した名もない女性が登場していることです。

もう一つは、バフリム村のある男の妻がヨナタン・アヒマアツを匿ったことです。このように「スパイ・ネットワーク」というダビデの知恵を越えた神の助けがあって、ダビデへと連絡が届くのです。明らかに聖書は、主なる神御自身が、ダビデの知恵を越えて守り導いている、と告げています。

【17 章 23 節】

こうしてアヒトフェルの追撃案は実行されませんでした。そのため彼は自宅に戻って自害しています。これは、もちろん彼がアブサロムの顧問官として誇りを傷つけられたためでしょうが、果たして人はそのことだけで自害するのでしょうか。今やアブサロムを取り巻く状況は変わりました。アブサロムを支配するのはアヒトフェルではなく、「ダビデの友」フシャイでした。アヒトフェルにはフシャイが「ダビデの友」として、ダビデを勝利に導くことが確実に予想できました。そうならばアヒトフェルを待っているのは死刑です。しかし彼はダビデの判決で死刑になることだけは避けたかったわけです。アヒトフェルはバト・シェバの父祖でした。ですから彼は特に孫娘の夫であったウリヤに対するダビデの仕打ちは赦せなかったのではないのでしょうか。こうして自害を選びました。その意味で、彼の自害は、ダビデの勝利を予告するものなのです。